

宮澤賢治論

『春と修羅』第一集を中心として

岡屋昭雄

抄録

一九九六年、八月二十七、二十八、二十九の三日間、岩手県花巻市において、宮澤賢治国際学会が開催され、国内の賢治研究者、賢治愛好者のみならず、外国からも多くの賢治研究者が参加されたのである。

もとより、賢治の童話や詩が多く、国で翻訳されていることもあり、賢治生誕百年の今年は日本のみならず、諸外国でも高い評価を得ていることは周知の事実であろう。したがって、賢治ブームを単なる一過性のものとして終わらせることなく、賢治の詩や童話、さらには科学と宗教と文学の一致や思想や、哲学が二十一世紀を切り拓くものとしなければならないのである。賢治の童話の世界は人間中心ではなく、全ての存在が平等であることであり、深い宗教観に支えられ、科学と宗教は両立するのである。アメリカのカレン・コリガン・テイラーさんは、「近代化の過程で昔からの生活の知恵を

伝えてきた神話や民話が語られなくなり、教育がテクノロジーや情報収集を果たす役割にすぎなくなった現代では、新しい神話が必要となりました。」と述べつつ、「宮澤賢治の作品は岩手に根を下ろし、読者にある場所との親しみを感じさせながら、時間と場所を超越して、読者に惑星の生物共同体の委員資格を与えるための神話として読まれます。」と強調するのである。

筆者は、今回は『春と修羅』第一集を中心として、その「梵我一如」の世界を中心に我々今を生きる人間が見失っている感性の世界を取り上げ、論究することを目的とする。

キーワード 梵我一如 修羅 心象スケッチ 妹の死 山川草木
悉皆成仏

はじめに

この六月八日（土）、毎日新聞の〈新聞時評〉に、作詩・作曲家のみなみらんぼう氏が、文章の結論として次のように述べる。

このように我々の社会は、小さな異変大きなブームを繰り返しながら、確実に変化の度合いを速めている。若者は「もう土地も家も結婚もいらない」といい始めている。そんな中で本当に大切なもの、たとえば賢治など、どうかブームに終わらせてほしくないと思う。

つまり、みなみ氏が述べていることは、賢治の抱持している思想が現在の危機、わけてもその精神的な危機を克服する豊かな展望があり、それ故に単なるブームに終わらせたくないというのである。らんぼう氏が紹介する「ぼくらはもう一つ胸に刻んでおかねばならない。宮澤賢治という人はもう日本から永久に離れてしまっている……」との言葉は、ロジャー・バルバースの文章から引用したものである。五月二十八日（火）、毎日新聞の夕刊には、「日本人は『賢治』を失った？」と題して、ロジャー・バルバース氏は、次のように述べる。

どこの国の子供にしてもおかしくないジョバンニやカムパネルラを作り上げたあの日本人こそ、全世界における全世界の象徴だ。そんな評判が今後広がることを期待しよう。今世紀が終わる頃も、賢治はずっとぼくらの中に入れてくれるから。しかし、ぼくらはもう一つ胸に刻んでおかねばならない。宮澤賢治という人

はもう日本から永久に離れてしまっている……。世界へ、あるいはどこか別のところへと向かって……。

つまり、ロジャー・バルバースが述べるように、「欧米作家の中には、まさにこれぞ『辺境』という背景から派生した人が多いが、彼らは皆永遠に続く真の国際性を希求し、かつそれを実現した。」と いい切るのである。だからこそ、いい加減なブームに終わらせてはならないというのである。この文章の結論部分である、最後の文章は「宮澤賢治という人はもう日本から永久に離れてしまっている……。世界へあるいはどこか別のところへ向かって……。」と結ばれているのであるが、この意味は深く、かつ難解である。というのも、単なるブームに終わらせてしまうのであれば、二十一世紀にかけての人間復活の期待は儂い結末を迎えるのは当然であり、我々今を生きる人間が真剣・真摯に自分の人生に挑みかかるような生活をしなければ見えてこないものであるから。したがって、賢治の後追いだけはやめたいものである。自らの生き方を鮮烈にする以外に展望は見えてこない。「日本人は『賢治』を失った？」はその意味でも、我々の胸を抉られるような痛さを感じるのは筆者だけであろうか。したがって、この論稿を通して賢治の詩の世界・宇宙を閲することによって読者の生き方の変革を迫るような読みにならないければ、ロジャー・バルバースやみなみらんぼうの危惧するような単なるブームに終わってしまうことになる。国語の授業では、だからといって鑑賞のみに終わる詩の指導ではなく、賢治が苦悩した軌跡を丹念に辿りつつ、推敲の過程、あるいは、他の作品と連続させながら賢治

の思想の深まりを探究していくような指導を考えたいのである。賢治の詩は読者が安易に分かることを峻拒するのである。つまり、辞書的な意味世界を超えて賢治の描く世界を読者は共有することが肝要となるのである。

一、賢治の詩を通して見る「賢治の感性の世界・宇宙」

ところで、『春と修羅』第一集にある「高原」と題された次の詩に魅力を感じる。

高原

海だべがど、おら、おもたれば

やつぱり光る山だぢぢやい

ホウ

髪の毛 風吹けば

鹿踊りだぢやい

上掲の詩「高原」は、大正十一（一九二二）年六月二十七日に書かれたものであり、「岩手山」「印象」「高級の霧」と同じ日付になっている。雑誌「宮沢賢治 十二 特集一賢治短歌の深層」（洋々社一九九三年二月二十日）に山口昌男氏と牧野立雄氏とが「宮沢賢治の祝祭空間」の題目で対談をする。この対談で、山口氏は、「……東北自体が近代性からいえばバルネラブルな世界のわけだ。宮沢賢治の世界は、そういう一見マイナスに見えるものを逆手にとって独

特のリズムを作り出している。中央において整合された『赤い鳥』の世界とは違ったような、独特のリズムを作りだしている。というより一種の始源的なくびきを脱するために、バルネラブルなものを逆に組織したということが宮沢賢治にある。それが東北のもっている神話的な背景によって満たされている。『山男の四月』の山男とか、『なめとこ山の熊』のマタギ（小十郎）とか、作品の中にそれがかたまりとして具体的に出てくる。彼らは平地にたいしてまったくバルネラブルな存在であり、平地に出てくると実際にいじめられて、ひどいめにあう。それも異様だということではなく、彼らもっているイノッセンズの善良性のためにそういうふうなめにあう。（前掲雑誌 一九一頁）というのである。また、山口氏は、「「こぞかしくなった平地の人間に対する『日本人』みたいな感覚が作品の中に生きているんだね。宮沢賢治は、そういう感覚を、詩的な想像力の初源的なところに位置づけている。だからそこから出てくる動物の世界とか、子供の行動とかが、宮沢賢治のもっている宇宙の中で、『銀河鉄道の夜』のように冥界へ行き、高みに達していたはずのものとも出会う。」と述べつつ、中央と周縁に位置し攻撃を受けやすい性格、あるいは、ある種の病気になるやすい体質というバルネラビリティー（攻撃誘発性とか、脆弱性、と山口は述べる。）とか、異人、祝祭性というコードで宮沢賢治の詩の宇宙・世界を体験するということが大切になると、主張するのである。例えば、『修羅』を仏教的に捉えないで、祝祭性で捉えようと、「おれはひとりの修羅なのだ」の世界がダイナミックに展開されるというので

ある。

また、早い時期から賢治の詩に高い評価をしていた草野心平は、賢治の詩の特性について次のように述べる。

「春と修羅」を通読して先ず第一に感ずることはその透明な色彩と音楽（傍線筆者、以下の傍線も筆者）である。語彙の豊富である。その底にしかで力強い「宮沢賢治」の全貌が横たわっている。

光と音への異常とも思われる程の鋭い感性によって、彼は山や農場や鳥や虫や動物や人物や植物などを彼の心象のカメラに映した。それらは東北からサガレンにかけての純粹トーキーであり、その中で彼は一個の岩やホルスタインなどと同じく、自然点景の一分子になっている。そしてその底に宮沢賢治の心象が「さびしさと悲傷とを焚いて」はげしく息づいているのである。（以下三百五十三行中略）彼は原始の眼で自然を見た。彼は土壌学その他科学や化学に深い造詣をもっていたばかりでなく、対社会にそれらを実践してい乍ら、しかも古事記や万葉や古代人の如き純粹さで自然に驚愕し、その美に醗酵し得たのは、彼の感性が始めっから人並でなかったことを立証すると同時に、彼自身の内部に生育した如何なる知識も、彼と自然との熱烈な交渉を遮断し得るものなかつたことを教えてくれるばかりではなく、却ってそれらの知識は彼をして益々自然界に没入させる導因にもなった。

草野心平著『宮沢賢治覚書』（講談社 一九九一年三月）

つまり、草野は、宮沢賢治の詩の特性を鋭く言い当てているのである。「透明な色彩と音楽」とか「光と音への異常とも思われる程の鋭い感性」であるというのである。つまり、賢治は原始の眼で自然を見たというのである。草野があげる「その透明な色彩」ということについてである。福島章はその著『天才の精神分析』パートグラフィの冒険』（新曜社 一九七八年）において宮沢賢治は、循環氣質者（同調性と躁鬱性気分変化）と考えられるのに対して中原中也は、分裂氣質者（妄想的で対人葛藤的）であるというのである。このことの根拠として、クレッチマー（Kretschmer, E.）は、その著『体格と性格』（文光堂 一九六八年）において「循環氣質の作家の詩的な美しさは、そのみごとに色彩や、個々の描写の豊かさ、そこに漂う温かい心情にある。（中略）分裂氣質の作家の小説は色彩に乏しい。」と述べるのである。したがって、賢治の詩は色彩語が豊かであるとの仮説が成立し得るのである。

| 作者 | 作品 | 総行数 | 色彩語の総数 | 色彩語の頻度 |
|------|----------|------|--------|--------|
| 宮沢賢治 | 『春と修羅』 | 二一九六 | 四四〇 | 七行に一個 |
| | 『山羊の歌』 | 九九四 | 五十四 | 十八行に一個 |
| 中原中也 | 『在りし日の歌』 | 一〇七三 | 七十七 | 十四行に一個 |

以上のことからも明らかなように賢治の詩には色彩語が極めて多いことが分かるであろう。したがって、賢治の詩においては、色彩語が作品鑑賞の重要な役割を果たしていることになる。一方、身体語の使用頻度については次のようになっている。つまり、この文体指

標は、分裂症の症状をもつ患者の特性を示すものとなるとの仮説を裏付けるものである。

| 作者 | 作品 | 総行数 | 色彩語の総数 | 色彩語の頻度 |
|------|----------|------|--------|---------|
| 宮澤賢治 | 『春と修羅』 | 二九六十 | 一三六 | 二十二行に一個 |
| | 『山羊の歌』 | 九九四 | 一〇二 | 十行に一個 |
| 中原中也 | 『在りし日の歌』 | 一〇七三 | 一一八 | 九行に一個 |

以上の三作品のテキストは、『春と修羅』は、『新』校本宮澤賢治全集 第二巻 詩(1) (筑摩書房 一九九五年七月)、『山羊の歌』『在りし日の歌』は岩波文庫である。以上のことから宮澤賢治は、循環気質であることが分かる。つまり、色彩語が作品に多彩に登場することである。したがって、指導にあたって、色彩語の指導を丹念に行う必要があることになる。もとより、身体語の指導を行わないということではない。例をあげて説明をする。

岩手山

そらの散乱反射のなかに
古ぼけて黒くえぐるもの
ひかりの微塵系列の底に
ひしめく微塵の深みの底に (宮沢家
本自筆手入れ結果)
きたなくしろうく澱むもの

上掲の詩では、古ぼけて「黒く」えぐるものは、そらの散乱反射

のなかに「見えてくるものでありつつ」も、祈りのような祈念が見えてくるのである。きたなく「しろうく」澱むものも、ひかりの微塵系列の底に確として存在しているのである。「心象スケッチ」の完成期に位置する「東岩手火山」(大正十一年九月取材)の冒頭部分には、「月是水銀 後夜の喪主／火山礫は夜の沈澱／火口の巨きなえぐりを見ては／たれもみんな愕くはずだ／は(風としげき)／いま漂着する薬師外輪山／頂上の石標もある／(月光是水銀 月光是水銀)／(こんなことはじつにまれです／向ふの黒い山……つてそれですか／それはここにつづきです／このつづきの外輪山です／(十行略)／お日さまはあすこらへんで拝みます)」と唱われる。この詩は、農学校の生徒数人と御来光を待っている時の詩であることは説明するまでもないであろう。二一八行のにわたる記述は一貫して地の文に風景や行為、括弧内に記述者の思考が述べられる。「月是水銀」という風景が反響されたり、「こんなことはじつにまれです」という思考から「向ふの高い山……つて」という発言に推移したり、相互発的で画然としたものではないのであるが、風景と思考と声の三層が巧みに織り込まれている。

「岩手山」では、その萌芽がみられる。「そらの散乱反射」の表現に込められた賢治の思念が鮮烈な印象を与えてくれるのである。つまり、この世のものとも思われない神秘的な雰囲気と漂わせると同時に、人間を越えた行為の素晴らしさを感じるのである。あるいは、「ひかりの微塵系列の底」といわれる時に畏敬の念を抱くのみであり、読者は沈黙せざるを得ないのである。我々人間が、忘れて

しまっている世界を豊かに展示して見せてくれているのである。眼に見えるもののみを信じるのではなく、眼に見えないものを信じるという世界が、この「岩手山」にある。

業の花びら

夜の湿気が風とさびしくいりまじり

杉ややなぎの林はくろく

空には暗い業の花びらがいつぱいで

わたくしは神々の名を録したことから

はげしく寒くふるへてゐる

ああたれか来てわたくしに言へ

「億の巨匠が並んでうまれ

しかも互いに相犯さない

明るい世界はかならず来る」と

……遠くでさががなくてゐる

夜どほし赤い眼を燃して

つめたい沼に立ち通すのか……

この詩を梅原猛氏は雑誌『文芸読本 宮澤賢治』（河出書房新社 一九八一年四月）の一〇二頁に「修羅の世界を超えて」の題目で「世界は未だ夜である。修羅の夜である。そこには業の花びらがいつぱい咲いているのである。しかし夜は必ず明けるはずである。億の巨匠が相犯さない理想の世界は必ずくる。しかしその世界は遠い。遠く遠く、はてしなく遠い。／賢治は、その遠い世界を待ちながら、

夜どほし赤い眼をしてない一羽のさぎなのだ。」と、極めて的確な評価をする。

賢治はただ、遠い世界を望見しつつ、赤い眼をしてないのみではない。彼は、そういう世界の実現のために生命を賭けているのである。修羅の世界に自分を置きながら、仏の世界を模索し続けたのである。それは、人間相互が互いに相犯さない明るい世界を招来させるためである。この「業の花びら」と「野の師父」（生徒諸君に寄せる）等をつないで教えれば、賢治の思想に軌跡は掴めると考えられる。「春の修羅 第一集」は、妹の詩を詠った「水訣の朝」「松の針」「無声慟哭」の三遍の詩を中心に、「青森挽歌」「オホーツク挽歌」「樺太鉄道」「鈴谷平原」「噴火湾（ノクターン）」を中心とした妹トシ子の死の行方を探し尋ねる旅、あるいは、あるいは、幻想と現実が相互に交流し合う世界を描いた「小岩井農場」、さらには、自然との交歓・交流を素直に描いた「原体剣舞連」を代表とする心象スケッチ群に分類されるのである。

原体剣舞連

(mental sketch modified)

dah-dah-dah-dah-dah-sko-dah-dah

こんや異装のげん月のした

鶏の黒尾を頭巾にかざり

片刃の太刀をひらめかす

原体村の舞手（おどりて）たちよ

搗いろのはるの樹液を

アルペン農の辛酸に投げ

生しののめの草いろの火を

高原の風とひかりにさゝげ

菩提樹皮(まだかは)と繩をまとふ

気圏の戦士わが朋たちよ

青らみわたる顯氣をふかみ

檜と「櫛」(ぶな)とのうれひをあつめ

蛇紋山地に簪をかかげ

ひのきの髪をうちゆすり

まるめろの匂のそらに

あたらしい星雲を燃せ

dah-dah-sko-dah-dah

肌膚(きふ)を腐植と土にけづらせ

筋骨はつめたい炭酸に粗(あら)び

月月(つきづき)に日光と風とを焦慮し

敬虔に年を累ねた師父たちよ

こんや銀河と森とのまつり

准平原の天末線に

さらにも強く鼓を「鳴」らし

うす月の雲をどとませ

Hoi Hoi Hoi

むかし達谷の悪路王

まつくらくらの二里の洞

わたるは夢と黑夜神

首は刻まれ潰けられ

アンドロメダもかぶりにゆすれ

青い仮面このこけおどし

「太」刀を浴びてはいつぶかぶ

夜風の底の蜘蛛をどり

胃袋はいてぎつたぎつた

dah-dah-dah-dah-dah-sko-dah-dah

さらにたたく刃を合はせ

霹靂の青火をくだし

四方の夜の鬼神をまねき

樹液をふるふこの夜さひとよ

赤ひたたれを地にひるがへし

電雲と風とをまつれ

dah-dah-dah-dah

夜風とどろきひのきはみだれ

月は射(ぬ)そそぐ銀の矢並

打つも果てるも火花のいのち

太刀の軋りの消えぬひま

dah-dah-dah-dah-dah-sko-dah-dah

太刀は稲妻萱穂のさやぎ

獅子の「星」座に散る火の雨の

消えてあとなない天のがはら

打つも果てるもひとつのいのち

dah-dah-dah-dah-dah-sko-dah-dah

上掲の詩は、人間と自然も宇宙も一体となっていることが分かり、まつろわぬ民といわれた東北の人たちの悲しい叫びも聞こえるようである。「悪路王」といわれている中央政府によって攻め滅ぼされた王も登場して踊っているようである。真実の叫びであり、血の叫びでもある。そして、「四方の夜の鬼神をまねき」とあるように、人間が未だ自然との一体感を持っていた時代のまさに「銀河と森のまつり」なのである。「dah-dah-dah-dah-dah-sko-dah-dah」のリフレインも天と地をどよもすまさに価値観を逆転させる意味・価値をもつまつりなのであり、人間が原始時代を懐かしむまつりであるといつてもいいのである。

あるいは、大正十一（一九二二）年四月に作られた「雲の信号」に流れる新鮮な叙情に触れると、五月頃の透明な空気に肌を洗われ、私たちの感覚はそれまで知らなかった未知の世界に導かれ、生きる感動を取り戻すことができるのである。

雲の信号

ああいいな せいせいするな

風が吹くし

農具はびかびか光つてゐるし

山は！ ほんやり

岩頭だつて岩鐘だつて

みんな時間のないころのゆめをみてゐるのだ

そのとき雲の信号は

もう青白い禁欲の

春ぞら高く掲げられてゐた

山はほんやり

きつと四本杉には

今夜も雁がおりにくる

二、具体的な詩の指導を通して

『春と修羅』第一集の「序」に書かれている次のことばに注目させられるのである。「わたくしといふ現象は／仮定された有機交流電燈の／ひとつの青い照明です／（あらゆる透明な幽霊の複合体）／風景やみんなといつしよに／せはしくせはしく明滅しながら／いかにもたしかにともりつつける／因果交流電燈の／ひとつの青い照明です／（ひかりはたち、その電燈は失はれ）」の一連に続いて、第二連では、「これらは二十二箇月の／過去と感ずる方角から／紙と鉱質インクをつらね／（すべてわたくし）と明滅し／みんなが同時に感ずるもの）／ここまでたもちつゞけられた／かげとひかりのひとくさりづつ／そのとほりの心象スケッチです」と明確に述べられるのである。つまり仏教的な因縁論・因果論である。童話の『茨海小学校』は、「たゞ呉れ呉れも云つて置きますが狐小学校があ

るといってもそれはみんな私の頭の中にあつたと云ふので決して偽ではないのです。偽ではない証拠にはちやんと私がそれを云つてゐるのです。もしみなさんが聞いてその通り考へれば狐小学校はまたあなたにもあるのです。」となるのである。「それから、さうさう、苔の野原の夕陽の中で、わたくしはこのはなしをすきとほつた秋の風から聞いたのです。」で終わる『鹿踊りのはじまり』、あるいは、『サガレンと八月』では「風が私にはなしたのか私がかぜにはなしたのかあととはさつぱりわかりません」との告白を同様に風から聞いた話である。一種の幻想・幻聴とはいへ、異界に縁遠い者が感性の鈍さを感じさせるのである。「たゞ呉れ呉れも云つて置きますが狐小学校があるといつてもそれはみんな私の頭の中にあつたと云ふので決して偽（うそ）ではないのです。偽でもない証拠にはちやんと私がそれを云つてゐるのです。もしみなさんがこれを聞いてその通り考へれば狐小学校はまたあなたにもあるのです。」という文章に出会つと「序」の第二連を想起するのである。賢治は茨海の野原で狐に出会い、幻視の目で狐を狐と見る自由を手に入れたのである。あるいは、「心象スケッチ」では、「すべてがわたくしの中のみんなであるやう」な「みんなのおののなかのすべて」を捉える自由を手に入れるのである。「宇宙感情」や「四次感覚」を新たに注入することによつて再生せざるを得なかつたのである。それは、「風とゆきさし 雲からエネルギー」をとることであつた。（『農民芸術概論綱要』）

言語は経験から帰納された体系ではなく、演繹的な概念を身体の

現場に下ろして展開していくわば「もう一つの空間、あるいは宇宙」といえるのである。したがつて、「心象スケッチ」の作品に接する読者は、賢治の描き出す世界・宇宙を辞書的意味を当て填めたり、あるいは、理屈で理解したりすることなく、賢治の作品の発するメッセージを謙虚に受け取ることになる。『注文の多い料理店』の「序」のように、「ですから、これらのなかには、あなたのためになるところもあるでせうし、ただそれつぎりのところもあるでせうがわたくしには、そのみわけがよくつきません。なんのことが、わけのわからないところもあるでせうが、そんなところは、わたくしにもまた、わけがわからないのです。」ということになるのである。そして、「これらのおはなしは、みんな林や野はらや鉄道線路やらで、虹や月あかりからもらつてきたのです。ほんたうに、かしはばやし青い夕方を、ひとり通りかかつたり、十一月の山の風のなかに、ふるえながら立つたりしますと、もうどうしてもそんな気がしてしかたないのです。ほんたうにもう、どうしてもこんなことがあるやうでしかたないといふことを、わたくしはそのとほり書いたままでです。」に込めた賢治の思いは自然からの声を素直に感じたことをその通りに書いたものであることは確かである。筆者は、一九九三年十月二十二日（金）、岩手大学教育学部付属小学校の五年生を対象に二十五分間の授業実践をさせて貰つた。準備するものとして「鹿踊り」の大きな写真を用意した。鹿踊りの写真から、海とも見まがう、光り輝く高原で風に吹かれるのが鹿踊りのたてがみを靡かせている感じであるというのである。したがつて、写

真は鹿踊りの風景から、風の吹く様を思い浮かべることになる。

「高原」という詩は、最初つけられた題が「叫び」であることにも触れておきたい。また、この詩が方言で書かれていることの意味も読者の意味付け、価値付けが必要となるのである。高原の詩を紹介する。「海だべがど、おら、おもたれば／やつぱり光る山だたちやい／ホウ／髪毛（かみけ） 風吹けば／鹿踊りだぢやい」（制作年月日 大正十一年六月二十七日）を何回も読んでみると花巻方言を発する人間の匂い・生命が感じられるようになってくる。東北という土地・地方は、かつては、陸奥（みちのく）として、それはあくまでも、都のあった奈良や京都から見えて僻遠の地であったことに由来するのである。中央即文化、地方即野蛮との中央からのパラダイムで見られていたことは歴史の明かすところである。そして、蝦夷征伐の名の許に、中央の政治に組み込まれたことは東北の民にとつては、屈辱であったはずである。したがって無意識的であれ、あるいは意識的であれ、中央の文化や政治に対して反発する心性があつて当然であろう。

若い賢治が一読して人生の方向を変えてしまうほどの衝撃を与えた『妙法蓮華経』には、次のような一節がある。「衆生劫尽きて大火に焼かると見る時も／我が此の土（ど）は安穩にして 天人常に充滿せり／園林諸（おんりんもろもろ）の堂閣種種の宝をもつて莊嚴し／宝樹華果（ほうじゅけか）多くして 衆生の遊樂（ゆらく）する所なり／諸天天鼓を打ちて 常に衆の伎樂を作し／曼陀羅を雨（ふら）して 仏及び大衆（だいしゆ）に散ず」とあり、この

文章は、島地大等の訳になるものである。天の鼓や天の音楽といったイメージは、賢治の詩の「春と修羅」や多くの詩に散見されるのである。例えば、詩「風林」では、「とし子とし子／野原へ来れば／また風の中にたてば／きつとおまへをおもひだす／おまへはその巨きな木星のうへに居るのか／鋼青莊麗の空のむかふ／（ああけれども そのどこかも知れない空間で／光りの紐やオーケストラがほんたうにあるのか／此処（ここ） あ日あ水（な）あがくて／一日（いちにち）のうちの何時（いつ）だかもわがらないで……／ただひとときのおまへからの通信が／いつか汽車のなかでわたくしにとどいたただけだ」となっていることからでも分明であろう。

ところで、妹・トシが亡くなった以後、つまり大正十一年十一月二十七日以降の作品には、宗教的な世界・宇宙が深められると同時に、賢治の感性が研ぎ澄まされて来るのである。妹・トシを探し求める大正十二年七月三十一日からの北への旅の端緒は、「永訣の朝」「松の針」「無声慟哭」の三編の詩を妹・トシの亡くなった日に書いた後、およそ七ヶ月の間、執筆活動ができない程の憔悴状態に陥つたのである。その理由は、「無声慟哭」で賢治が「わたくしは修羅をあるいてゐるのだから」「わたくしが青ぐらい修羅をあるいてゐるとき」と、悲しそうな眼をしながら、妹に何もしてやれない空しさを嘔みしめているものである。賢治の此岸から彼岸への通路は風や光りや、あるいは空に浮かぶ雲であつたりするのであり、人間の空想もまた、此岸から彼岸への通路なのである。

筆者は、賢治の作品は読者が安易に作品を理解されることを拒否

していることを昭和四十五（一九七〇）年度に担任した広島大学付属三原小学校の五年生の子どもに教わったことを想起するのである。童話「やまなし」を授業実践していた時に、教材に出てくる「克蘭ボン」「イサド」等、賢治の造語した語彙の意味に拘っていたのは、教師である私の方であったのである。勿論、「克蘭ボン」が水の上を気持ちよく泳ぐものであり、「イサド」が理想的な場所であり、救済を意味することは理解してのことである。渡部芳紀は、賢治作品の読み方について次のように示唆的なことを述べる。

……頭で作品を読むのもいいであろう。が、それとともに、感性で、皮膚で、感触で作品を味わうのも許されるのではないか。

(一)
つまり、頭で読んでもいいというのは、辞書的な意味を当てはめて読んでいいというのであり、今の学校教育の国語科教育の授業がまさにそれである。筆者は賢治作品を読むという行為は、賢治の描く世界に遊ぶという行為でなければならぬと捉える立場であり、渡部という「感性で、皮膚で、感触で作品を味わう」ことを重視するのである。したがって、賢治の描く作品世界・宇宙に直接経験として参加することである。言語を読むという行為は間接経験である。つまり、辞書的な意味世界を頭に思い描くことになる。それにしても、富士山を直接的に見ている人間と見ていない人間ではその理解の深さは違ってくるはずである。渡部がおらずと述べるような読み方を大胆に取り込むような実践が望まれるのである。つまり、切実な文学体験をこそすべきである。

渡部は、賢治作品の特徴を次のように述べる。

かねがね、私が言っていることであるが、賢治作品の最大の魅力は、その文体である。表現である。その響きの美しさ、楽しさ、リズムである。それが最も表れているのが、賢治のオノマトペ表現である。北原白秋が『赤い鳥』に翻訳していった「マザーグース」の影響なども受けながら、賢治は実に新鮮で魅力的な響きの世界を作り上げている。

（キックキックトントンキックキックトントン）（「雪わたり」）
（赤いしゃつぽのカンカラカンのカアン）（かしはばやしの夜）
（のろづきおほん、のろづきおほん、／ごぎのごぎのおほん）

（「かしはばやしの夜」といった響きの楽しさ美しさの世界は賢治作品のいたる所に散りばめられている。賢治の作品に意味の側面から接した場合は、何度もよむうちにその魅力が減じてくる事もあるが、響きの側から読んでいった時には、何度読んでも飽きない魅力が溢れているのである。「傍線 何れも筆者」(二)

つまり、渡部のいう響きの側から読むというのも、声に出しながら、つまり、何回も朗読を繰り返しつつ、賢治の世界を味わうことである、ということになる。

最近、筆者は大学二年生の講義で、「高原」(二三)の詩を扱った。その前に、工藤直子の「ライオン」を鑑賞させた。「雲を見ながらライオンが／女房にいった／そろそろ めしにしようか／ライオンと女房は／連れだつてでかけ／しみじみと縞馬を喰べた」の詩に戸惑いが見られた。作者が「女房」とわざわざ書いた仕掛けは、ある

第5学年国語科学習指導案

日時 1993年10月22日（金）

14：00～14：25

授業学級 岩手大学教育学部附属小学校第5学年

指導者 香川大学教育学部 岡屋 昭雄

1 単元 賢治の詩を読む——「高原」を賢治の他の作品と関連、関係させて——

2 研究の視点

○ 国語の授業に対する子どもの反応がおかしくなっている。つまり、国語嫌いが増加していることである。その原因は様々であり一口でいうことは困難であるが、私は、教師の自信を持って教える姿勢と、「語り」の構造を失っていることに起因すると把握する。つまり、我と汝が語り合い、西田幾多郎が主張する「主客一如」の宇宙を作ることになる。それは教育学者の峰屋慶の主張する「技術と超越」の宇宙とも共通する。したがって、学習に集中しつつ、自己の既成の枠組みを破り、新たな世界観の獲得と、確かな自己理解を生み出すものでなければならない。この「高原」の詩は、その意味で賢治の深い思想を抱持するものであり、前掲の思想を身につけることの可能な教材である。したがって、「光る山」「ホウ」「風吹けば」「鹿踊り」の語彙を媒介とし、賢治の心の世界が彷彿とイメージでき、自然と人間とが感情を通わせれば、この作品の世界は、見えてくる。とりわけ、「鹿踊り」は、「鹿踊りのはじまり」の最後に書かれている「苔の野原の夕陽の中で、わたくしはこのはなしをすきとほつた秋の風から聞いたのです。」と重ね読みすることによって、豊かに東北・花巻の自然と人間の在り方が自然と身について来る筈である。

○ 梅原猛は、賢治の思想に縄文文化の匂いがし、まつろはぬ東北人の叫びがあると指摘する。東北の祭りの爆発するようなエネルギーがそれを示すとも述べる。したがって、学級の実態は分からないが、「高原」の詩の世界に遊ばせつつ、詩の技法読みを中核に据え、子ども達が馴染んでいる方言の世界をもくぐり抜ける楽しさも指導として考えられるであろう。現実の世界を超越しつつ、心の世界、理想の宇宙に遊ぶことの意味をも把握させることは可能であろう。賢治の童話の世界の構成材料（例えば、「風」「鹿踊り」等）も視野にいれ、読む楽しさを分からせたい。まさに発見する楽しさのようなものが分かって貰えればこれに過ぎる喜びはない。

○ 指導に当たっては、この詩「高原」を構成する語彙を手がかりにしつつ、全体のイメージを思い描くような方法も有効であろう。「賢治が『風』ということばを使っている作品から考えてみよう。」とか、あるいは、「『鹿踊り』の童話はどのように作られたのであろうか。」のようにである。「鹿踊り」の写真は2枚用意する。音楽も必要であるのかも知れない。これも用意して置くが学級の様子を見て考えたい。何れにしろ、子どもの自発性を尊重し、子どもの分からないこと、分かったことを発表させながら徐々に深めていく方向を取らざるを得ない。

3 目標

- (1) 賢治の詩「高原」を解釈しつつ、意味付け・価値付けることができる。
- (2) 語彙を関係付けつつ、イメージを豊かに思い描く方法を身につける。
- (3) 賢治の詩的宇宙の特徴、語彙の持つ世界のよさを発見する。

4 学習指導計画

○「高原」の詩的宇宙に遊びつつ、詩を豊かに読む方法を身につける。25分

5 本時の学習指導 本時の主眼は学習指導計画に同じのため省略します。

| 段階 | 教師の指導 | 児童の学習 | 備考 |
|-----------|--|--|----------------------------------|
| 1 学習課題の設定 | 「高原」の詩を読んで何が勉強できますか。 「分かったこと」 「分からないこと」 「勉強してみたいこと」 | 「何故方言を使っているのだろうか。」 語彙として 「風」「鹿踊り」「髪の毛 風吹けば / 鹿踊りだぢやい」「ホウ学習課題を明確にするために読み、深める方法を考える。 | しなやかな雰囲気 で |
| 2 詩の朗読 | 詩の宇宙、世界を理解するために目標として | | 教師が読み、児童3人に読ませる。 |
| 3 課題の追求 | この詩の構成は考えられるであろうか。「ホウ」以前と以後に分けられないであろうか「現実」から「空想・心の世界」というように 「ホウ」を手がかりとして何が見えるのか 「鹿踊り」をどうして思い描いたのか | 光る山と鹿踊りでは断絶があるのでは 「ホウ」のことばを発しつつ、賢治は飛び上がったのでは 「鹿踊り」のことは「風」の語ったことかな | 日常の世界の常識から飛躍しなければならぬ いことを求める。 |
| 4 学習の纏め | 今日初めて分かったことはないか 自分の世界は広がったのか | 今日の授業は自分にとって何だったのか。 | 簡単な感想を書く。 |

6 授業評価 「高原」の詩を通して、賢治の詩的宇宙を児童が把握できることが、最も重要な課題となり、詩の指導方法を構築する意味において、さらには、言語による人間形成が無化されるような時代に人間と言葉の関係はどうあるべきかを考える有効な材料となるであろう。

いは、「しみじみ」という感情語をどのように理解するのか、この作品で作者は、何を表現しようとしているのか。『てつがくのライオン』の題名とも関連させる必要があることを分かると意外と工藤の人生哲学も理解できたようである。つまり、人間も動物も生きている存在であるが故に、共存しなければならぬことに気がついたのである。それは、「高原」の詩が我々が持っている既成の概念を破るものであることがわかり、既成の概念で物を見てはならないことは、新鮮な感動で対象に接しなければならぬことを発見してくれたのである。

以上のことを視座に据えて、「高原」の学習指導案を掲載させて頂くこととする。

「高原」の授業実践についての解説

筆者は一九九三年十月二十二日、岩手大学附属小学校の五年生を借りて授業実践を行った。時間は二十五分間であり、もう一人、鳴門教育大学の浮橋康彦氏であった。私が広島大学の大学院で、西鶴と近松の講義を受講したのでいささか戸惑いを感じた。にもかかわらず、子どもの教育実践では私の方が多くこなしていると思いきや、ことにした。それは一つの自分にかける暗示でもあった。まず「高原」の詩を教師である私が範読する。重要な箇所は繰り返し何度も読む。このようにしつつ、子どもの興味・関心を集中するような配慮をする。語彙として「海」「山」を辞書の意味の通りに解釈して

はならないことをちゅういし、「どのような様子かそのように見えたら」を考えるようにヒントを与えた。「季節は」「時間は」「賢治には何が見えたのか」「その見えたことからどのようなことを連想したか」と空想の翼を広げることがを要求する。季節が秋であること、それも夕方であり、太陽の光を受けて神秘的に見えた植物を子ども達は、紅葉といったのはちよつと困ったが、一面に霧が海のようにかかっている風趣は、子ども達は理解したようであった。

確かに、この「高原」の詩の世界・宇宙は、秋の夕陽を受け薄の穂が煌めいて、また光の乱反射によってこの世の物とも思われないほどに神秘的な風景を醸し出している。「風」「光」「霧」「薄」のイメージから「鹿踊り」を連想する力は子どもにはない。したがって、逆に「鹿踊り」の写真から秋風から貰った物として、または、秋風が語ってくれたお話として考えさせた。そうすると薄の穂から「鹿踊り」を連想してくれた。

我々が賢治の作品に対する時、とりわけ心象スケッチといわれている詩に直面する際には、我々の既成の概念を捨て去ることであり、ことばの背後にある風景・風光を思い浮かべることが肝要となる。つまり、子どもが人間としての感性をフルに発揮することとなる。新しい生き方を獲得するいいチャンスなのである。辞書の意味を超越し、全身で対面すれば、その拠点が見えて来る。したがって、賢治の心になることである。作者と同じ地点に立つこととなる。他者へのイメージションが機能すればいいのである。「髪の毛風吹けば」も身体論的な語彙であるが故に、具体的にそのような状

況が見えて来なければならぬ。

「指示待ち」の子どもが多くなっていればいるほど、この詩の訴える世界の意味はそのことに比例して膨らんで来るのは必定である。私はモーツアルトのピアノ協奏曲の二十一番を録音しておいてそれをバックにして詩の朗読をした。秋から冬にかけて心の琴線に木霊して来るような思いを抱くのは筆者だけであろうか。

筆者がこの授業を子ども達にことばを越えて美しい世界・宇宙があることを教えたかったのである。それにしても、「感性」的認識を育てることは容易なことではない。物云わぬ自然と対話できる能力の必要なことを教えるいい機会であったことだけは確かであった。教師である筆者が子どもの豊かな感性を貰い受ける機会ともなったことに感謝するばかりである。岩手は秋も深まり、石川啄木の生家を見たり、賢治記念館も見学させて貰って心の休養となったことも付け加えておきたい。

とまれ、賢治の詩の授業実践が小学生対象にできたことはある意味で私の自信をつけて呉れた。岩手図書館で、私の研究論文に出会えたことにも驚くと同時に、今後とも、賢治研究に精進することを心に誓ったものである。

おわりに

筆者は、ピカート著『沈黙の世界』（みすず書房 一九七五年一月）の十四頁の〈始原の現象としての沈黙〉の冒頭の「沈黙は一つ

の始原の現象、つまり、もはやそれ以上荷物にも還元され得ない一つの本元的な事象である。沈黙は、造物主以外のものによっては何物によっても置き代えられ得るものではなく、また、何物ともとり換え得られるものではない。沈黙の背後にあって、われわれが沈黙をそれに関連させることの出来るものは、ただ造物主だけである。／沈黙は、その他の始原的現象、たとえば愛や、真心や、死や、生そのものと同様に、根源的であると同時に自明的に存在している。」のこばに震えるような感動を覚えるのである。

「もしも言葉に沈黙の背景がなければ、言葉は深さを失ってしまうであろう。」とのピカートの提言をも吟味しつつ、生命の溢れたこばを恢復しなければならぬのである。擦り切れたこばがまるで培菌のように撒き散らかされている現実を見据えると同時に辞書的なこばの意味を超越したさらに深いこばの世界・宇宙を構築するために賢治の詩の前に子どもたちを立たせたいと思うのである。

注

- (一) 国文学「解釈と鑑賞」(至文堂 一九九三年九月一日発行)第五十八巻九号 十三頁
- (二) 前掲雑誌 十二―十三頁
- (三) 工藤直子「てつがくのライオン」(理論社 一九九四年九月)二十二頁 他に「蟻」「てつがくのライオン」等のいい詩も沢山ある。

（おかや あきお 教育学科）

（一九九六年十月十一日受理）